ふるさとの道と地域再生

交通網整備で深まる交流 人と自然 生かす知恵を

拓殖大学長　**渡辺 利夫 さん**

私たちの生活になくてはならない道路。現在、南アルプスインターまで開通した中部横断自動車道や、圏央道などの工事が着々と進んでおり、隣接都県との交流や物流のさらなる発展が予想される。これからの「道」はどうあるべきか―。甲府市出身の拓殖大学長、渡辺利夫さんに、山梨の道やふるさとへの思いを語ってもらった。

拓殖大学長の渡辺利夫さんは、さまざまな表情を持っている。大学運営はもちろんだが、一方で山梨総合研究所理事長も務め、多忙な日々を送りながらも、ふるさと山梨の発展を常に考えている、という。

甲府市出身の渡辺さんにとって、ふるさとの忘れられない記憶が、一九四五（昭和二十）年七月の甲府空襲だった。「当時は湯田地区に住んでいて、家には将校が下宿していました。空襲の日、近所の人は太田町公園へ避難しましたが、将校に公園と反対の身延線の方へ逃げろと言われて、火の粉が降りかかる中を必死で逃げました。軍人の勘なんでしょうね。後日、公園が焼夷（しょうい）弾で全滅したと聞いて、恐ろしい思いをしたことを覚えています」と話す。その腕には、今もやけどのあと。

戦後、県民が一丸となって県都を復興。成果は目覚しかった。渡辺さんは刻々と変ぼうを遂げる山梨を肌で感じながら高校まで過ごした。「大学時代に列車で帰郷する時、この高い山がなければ山梨県はもっと発展したはずなのに、と思いました。けれど、交通革命でアクセスが向上すると、逆にこの自然こそが山梨のかけがえのない財産だと感じるようになりましたね」

豊かな自然にはぐくまれ、ブドウやモモなどの果樹やワイン、宝飾加工で全国に知られるようになった山梨。近年は、世界で圧倒的なシェアを持つといわれる半導体製造や液晶の製造工場が相次いで進出している。「いわば機械の機械を造るという、消費者の目には触れない分野。それだけに、この高度な技術があまり県民に知られていないことは残念です。世界屈指の技術がこの山梨県から育っていることは、まさに世界に誇れることですよ」

●●●●●

山梨で育つ一十関連企業の集積について「都内からも近く、清らかな空気や豊富な水資源を求めて工場建設が進んだわけですが、山梨という小さな県だからこそ生まれる信頼関係も企業の成長の要因でしょう」と分析。「他県に比べて工場の煙突が少ないことからも分かるように、一十関連企業は環境への配慮にも積極的。これは地域環境の保全に取り組む山梨県の考え方とも合致しています」と環境保全型の企業立地による県土の将来に大きな期待を寄せている。

また、山梨の重要な産業である観光に関しては「閉ざされたイメージを一掃し、他県やアジアに広く開かれた観光を目指すべきだ」と提言する。国民一人ひとりの所得水準が上がる一方で、高齢化も進む。そんな中で観光客のニーズも多様化し、成熟してきた。こうしたニーズにどう応えていくかが課題という。「中国や台湾から訪れる観光客の多くは富裕層。彼らは健康志向が強く、日本の医療水準が高いことを知っている。日本を定期的に訪れ、人間ドックを兼ねて観光を楽しんでもらうなど、観光と医療の二つのサービスを上手に結びつけた取り組みも今後のキーワード」と観光振興への独自の視点も。

一方で、観光には物語性が必要だとも言う。「文化財を守り、街をきれいにするだけでは、観光客は足を運んでくれない。地域はもちろん、県全体で連携を深めながら、それぞれの土地の持つ歴史や文化を時代のニーズに合わせて再編集し、新たな物語を打ち出すことで観光地として魅力が増す」とアドバイスする。

パークアンドライド推進を／中部横断道の役割にも期待

●●●●●

渡辺さんが生まれ育った甲府市の湯田地区は、商店街と住宅街が隣接する活気ある街。子どものころの楽しみといえば、道路で兄とキャッチボールをすることだった。「舗装されていない凸凹道で、野球好きの兄が全力で投げ込む球を捕らえるのに必死だった。正月に買ってもらった白い鼻緒の下駄を履いていた。懐かしい思い出です」という。

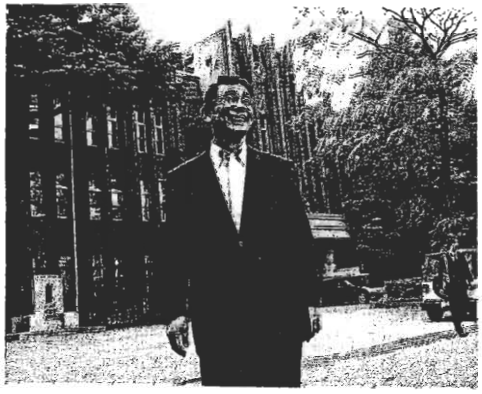
自動車がまだ少ない時代、道路はまた、人々の交流の場でもあったという。道端で立ち話をする主婦たち、追いかけっこに夢中の子どもたち。そこから世代を超えた交流が生まれていった。「今ではとても考えられませんが、青沼の道路の交差点に白い幕を張って映画がよく上映されました。今夜、映画があると聞くと、朝から浮き浮きして、映画を見た後は、同じ場所でみんなが話し込んでいたことを覚えています」

塩下町として発展した甲府市は、道路が複雑に入り組み、渋滞や交通事故が発生しやすい。二〇〇二年の国土交通省の調べでは、山梨県の県民一人当たりの渋滞損失は年間四十七時間で、岐阜県、宮城県に次いで全国ワースト3。国土交通省甲府河川国道事務所と山梨県は本年度から「道路見える化計画」を実施し、渋滞対策優先個所に三十九カ所、事故対策優先個所に四十七カ所を指定して渋滞と事故対策を進めている。月に二回は帰郷するという渡辺さんは「県内の隅々まで道路網が張り巡らされているのには驚いてしまった」と言いながらも、「公共交通機関が少ない山梨県は、マイカー依存度が高く、渋滞は仕方がないのでしょうか」と話す。

昨年九月には、公共交通の活用を促し、交通渋滞や大気汚染を緩和しようと県パークアンドライド推進協議会が発足。山梨総合研究所も実験に協力した。「パークアンドライドで、お年寄りも子どもも安心して、楽しく歩ける場所が増えれば、街は活性化するのではないでしょうか。ヨーロッパでも成功までに時間がかかったようですが、知恵を出し合いながら実験を進めていきたいですね」。話す言葉に熱がこもる。

また、工事が進み、現在南アルプスインターまで開通している中部横断自動車道については「道路には二面性がある。道路によって暮らしが生き生きと変わっていくこともあれば、より発展した地域にさまざまな資源が流失してしまう恐れもある」と分析。完成すれば、太平洋側の静岡市と日本海側の上越市をわずか約四時間で移動することが可能となる大動脈の未来について、「中部横断道が山梨の発展に貢献するかどうか、五年、十年、二十年という長い期間を見据えて真剣に道づくりを考え続けていかなければなりません」。

ふるさと山梨の発展には「山梨の県民性と言われる勤勉、忍耐、そして良い意味での社会的上昇志向を持ち続けることが大切」と話す渡辺さん。「周囲を山に閉ざされ、かつて貧乏県だった山梨だが、交通事情がよくなったことで東京や近県との交流も盛んになった。これからは二の道路を生かしながら、先人の残した歴史、文化も守って、活力ある山梨を築いていってほしい」と未来を担う世代にもエールを送る。



わたなべ・としおさん　1939年甲府市出身。慶応義塾大卒業、同大学院修了。経済学博士。筑波大教授、東京工業大教授、拓殖大教授を経て、2005年から拓殖大学長。山梨総合研究所理事長、外務省ODA（政府開発援助）総合戦略会議議長代理を務める。目黒区在住。67歳。

企画制作・山梨日日新聞社広告局